

接頭辞「小(こ)」の研究

一 日本における接辞

英語・ドイツ語・フランス語などと比べると、日本語は派生語の少ない言語だと言われる。それは、派生に際して不可欠である接辞の数が決定的に少なく、かつそれらの接辞のはたらきが十分活発でないからである^①と考えられる。これまで接辞のうち、〈接尾辞〉のいくつかについて考察してきた論者は、今一つの接辞である〈接頭辞〉に目を転じて考察を加えたいとおもう。これまで扱ってきた〈接尾辞〉と対比した場合、〈接頭辞〉は一部の漢語成分「不」「無」「非」「未」などを除くと、品詞を転換させる機能をもっていない点に一つの特徴が認められる。和語成分の〈接頭辞〉の添加は通例原成分である語基の品詞を変えることはなく、意味の変化や待遇性

の付与などの面で、ある変容を生じさせる点にはたらきが限られるのである。

小論においては、和語接頭辞の中から「小(こ)―」を選んで、その意味・用法・生産性などについて考察する。

二 接頭辞「小(こ)―」をめぐる問題

まず、初めに接頭辞「小(こ)―」に関する代表的な辞典類の説明を見ることにする。

- (1) 「やま」「みち」は単純語であり、「やま―みち」「こ―みち」は合成語である。(中略)「山」「道」「ひろ」は語基であり、「小―」「―げる」は接辞である。(項目「語構成」『国語学大辞典』^③)
- (2) 意味を添える例としては、(中略)小さいまたは

少しの意を示す「お川・こぎれい」(中略)などが挙げられる。(項目「接頭語」『国語学研究事典』^④)

「お酒・ご恩・か弱い・こきざみ・す肌」は接頭語の付いた派生語(中略)である。(項目「派生語」同前)

(3) 語や語基の前につくもの。語調を整えたり意味を添えたりする。「こ雨(さめ)」「お手紙」「御親切」「どん底」「たやすい」などの「こ」「お」「御」「ど」「ん」「た」の類。(項目「接頭語」『日本国語大辞典』^⑤)

辞典類においても「語構成」「接頭語」「派生語」の項目において、触れられているのは、この程度である。

接頭辞「小」^⑥には、現在種々様々の意味・用法が見られ、考察すべき点が多いと考えられる。例えば、幸田文の作品には、次のような使用例を見ることができ。

1 弟の方へ向いて下顎を突き出して、イーと嘲笑したら、弟も直ちに應じてイーとやつたので、二人は聞かなくてもい、小つびどい小言を食った。(「こんなこと」^⑦——経師)

2 終戦のどさくさで人は皆おのれにだけ忙しくしてゐたし、知らない土地であり世間と没交渉の小ていな生活であり、よしんばえらい先生と聞き傳へて來

たにしろ(「父」——菅野の記)

3 「水のやうな擴がる性質のものは、すべて小取^{こど}りまはしに扱ふ。…」(「こんなこと」——水)

4 私の夫は父の氣に入りさうな料理を出張させてはどうかと考へつき、當時小綺麗につくる八新亭を呼んで、文子夫婦からお祝ひ膳を献上することにした。

(「父」——菅野の記)

5 「盤の裏にある刻み目は、勝負に對して無禮だった者を討つたときに首を据える座だ」と、いつの間にか小耳にして恐れてゐたから(「こんなこと」——ずほんぼ)

6 あるとき「幻談」について話し、小旗本宅の情景に感じたところ(「こんなこと」——ずほんぼ)
以上の七例について少し説明をする。

1 a は形容詞「ひどい」に「小」が付いた例であるが、促音挿入と語頭拍の半濁音化が見られる。1 b は(叱言)という漢字が当てられることもあるが、名詞「言」に「小」が付いた例である。2 および 4 は「小」が付いた、いわゆる形容動詞の例であるが、2 が現代ではほとんど自立的には用いられず、実質性を失って半ば形式化した名詞「体(てい)」に付いた例であるのに対して、4 は

「綺麗」自体が元来の形容動詞語幹である点に差が見られる。3は動詞連用形からの転成名詞に「小」が付いたものである。5は身体部位名「耳」に「小」が付いた例であるが、通例後続の用言は「はさむ」「とまる」「聞きとる」であり、これらの用言を含めた句全体が、後述するように慣用化しているものである。6は辞書類に記載されていない派生名詞の例であるが、一々辞書に記載されるまでもない「小」による派生語であつて、今日までの「小」の生産性を感じさせる代表例である。いわば最も一般的なタイプと言つてもよいものである。

以上、幸田文による使用例を見てきたが、これらは現在一般に見られるものである。ところで、このような「小」の用法の基本は、元々古代から見られたものであり、中世のころから意味・用法が広がり出したと見られる。そして現代においては「小」という派生語は、『広辞苑』で約八八〇、『日本国語大辞典』で約三〇〇〇（これらには、ともに一割強の固有名詞が含まれる）に及ぶほどになっている。

中世を中心にした「小」については、早くに寿岳章子氏の研究があるが、他には「小」についての研究は見られないようである。そこで小論では、近現代を中心にこ

の接頭辞「小」について考察することにしたのである。

三 接頭辞「小」の略史

「小」は和語成分である。一方では同じく和語成分である「おへを」「さ」と、他方では漢語成分である「シヨウ（セウ）」と意味・用法の面で重なるところがある。（反義要素としては、和語成分の「おおへおほ」および漢語成分の「ダイ」がある。また両者の中間項として「なか」「チユウ（チウ）」を加えた特別のセットを形成することもある。これらの中では、上代では「こ」よりも「おへを」の方がよく用いられたようである。）

「小（こ）」の意味・用法のうち、〈物の小さいことを表す〉のが、最も基本的で一般的であると考えられる。それは、上代の用例が「小石」「小雨（こさめ）」「小島」「小菅」「小水葱（こなぎ）」「小樽」「小松」「小枝（こやで）」などの自然現象・地形・植物などを指す名詞に付くものにほぼ限られていて、形容詞に付いたものは、「高し」の語幹に付いた「小高み」一例を見るだけであるように、いずれも和語語基に付いており、また上代から現代まで一貫してこの用法が見られるからである。

「小（こ）」の用法は中古から徐々に多様化しはじめ

たことが語基成分の語種・意味分野などの多彩化によってわかる。「小除目」「小宰相」「小侍従」のような漢語に付くものが中古から見えはじめ、次第に「小門」「小女房」「小大徳」「小細工」「小綺麗」のような多様な派生語が増えていること、また、「小姫君」「小舎人」「小侍」「小せがれ」「小腕」「小腰」「小足」「小憎い」「小居眠り」など、和語成分との結合の中にも以前とは異なった意味・用法のものが見られることなどが指摘できるのである。

四 接頭辞「小」の付く成分

本節では、接頭辞「小」の付いている語・語基など、派生語の主成分について考察する。まず手はじめに卑近な基本名詞をとりあげ、「小」が付くかどうか考えてみよう。「パン・テレビ・シューズ・レンズ・カメラ・ドア・テーブル・チーム・ペン・セット・スプーン・トランプ」等々の外来語に「小」が付くことはない。現代日本語においては、「小」は外来語成分には付かないと言って差し支えないであろう。(古典の中には「小ラシャ」《色道大鏡》のような珍しい例が見られるほか、近現代にも「小ランプ」《浮雲》、「二人女房」《小バス》《金管楽器 Bass

の小さいもの)のような例がわずかなが見られる。)漢語や和語との結合においても制約はある。「学校・玄関・公園・煉瓦・遊戯・劇場・食器・庭園・会議・旅行・実験・宇宙」等々の多くの漢語には付かない。(意義的には漢語成分「小(シヨウ)」の付くものがある)また「音・におい・色・髪・皮・端・種・空・つぼみ・芽・根・上・横・うつわ・果物・さかずき・床の間」等々の和語にも付かない。この点で形容詞「小さい」、連体詞「小さな」の連体修飾機能にはとても及ばない。また、同じ接頭辞である「小(シヨウ)」にもひけを取るのである。以上検討してきたことから、和語接頭辞「小」はある限られた一部の名詞・形容詞・形容動詞・副詞にしか付かないという制約のあることが指摘できる。

では、「小」が結合する成分にはどんなものがあるかを以下に見ることにしよう。

四一 名詞成分

(一) ()内は漢語成分、《 》内は付かない成分の例示

- (一) 可視的具体物名
a 地理・地形関係 山 石 岩 島 穴 《くが はまべ》

b 動物関係 牛鳥魚虫亀鮎(綬鶏)

《毛虫 駱駝》

c 植物関係 松花枝森(菊)《すすき

しだれ柳 緋寒桜》

d 人物・職位等 男娘 倅舅 (坊主僧

役人 才子)《あるじ うし ねぎ》

e 道具・衣類等 扇 刀 舟 網 面おもて 槌

うち着(障子 銭ぜに 袈裟 道具)

(二) 自然現象名 雨風雪嵐潮《霧霜

霞 雹》

(三) 身体部位名 膝 股 胸 腹 首 足 手

うで ひたい はぎ 耳鼻口腰 吭はな 肘 し

わ《目 顎 頬 肩 臍 きも 胃》

(四) 数量名 (一時間 一里 一日 一両 一倍

半 半道^⑩ 半斤)《二時間 十日 二里半 五年》

この類は例外的と考えられるものを除くと、漢語成

分「一」または「半」を含む複合語にはほぼ限られる。

現代では「小一時間」「小一年」にほぼ使用が限ら

れてきている。

(五) その他 味 さき 物言 唄 話 節 切

手 為 替 仲 (細工 才 気 質)《におい かおり

音》

四一 動詞成分

(一) 連用形転成名詞 あきない あたり あるき

いそぎ おどり きざみ づかい ながれ なき

もどり わらい

(二) 派生動詞 がくれる 高る っぱずれる な

まる ばしる やむ ゆるむ (以上七例のみ)

四一三 形容詞成分

(一) 転成名詞 あか 辛から ひろ／びろ だか じ

ろ ひだる

(二) 派生形容詞 赤い 新しい 痛い 汚い じ

れつたい すさまじい ぜわしい 高い 楽しい

つびどい づらにくい 深い 嬉しい なまぐさい

ずるい うるさい 寂しい 憎い 憎らしい 長い

難しい 安い ゆるい やかましい ざかしい む

さくろしい 厚い 寒い 甘い ぬるい 早い む

さい 暗い ひだるい(馬鹿くさい 気味よい 面

倒くさい)

ここで注意すべきは、他の品詞の場合に比して語

形の長い例が割に多いことで、拍数による制限のゆ

るいことである。なお、語数の多いシク活用よりも

ク活用の派生語が多いことも興味深い。

四―四 形容動詞成分

まめ 粹(器用) 綺麗 癩 上手 達者 無慚ムザム 利巧(《スマート ナイーブ シック》)

形容動詞の成り立ちに関連して、漢語語基に「小」の付く例が少なくないことが指摘できる。

四―五 副詞成分

じつかり ざつぱり たくさん ぢんまり

以上掲出したもののうち、四―一と四―二は代表的な例であり、四―三、四―四、四―五は用例が少なく、前掲のものにはほぼ尽きる。この他「小ていナ／ダ」という例については第二節において触れたとおりであるが、歴史的には「体裁」の下略形に「小」が付いて成立した派生語とも見られる。

五 意味・用法から見た接頭辞「小」

ここで主として意味・用法の面から「小」について検討しよう。

五―一 小ささ(軽侮性・親愛感)

小ささ・矮小性を示す例としては、まず

小山 小岩 小石 小池 小島 小坂

のような自然・地理関係の名詞が挙げられる。次いで、

小猿 小犬 小牛 小山羊 小羊 小豚 小猫 小鳥 小鴨 小虫 小ざかな 小鯛 小鮎 小鱈 小えび 小がに

などの動物名を挙げるができる。この場合「小」の他に「子・仔」の漢字の当てられることも少なくはないが、実際の文脈・場面を把握しない限り、サイズ・体形の小さいことを指しているのか、生育面での未発育性を表しているのか、親動物に対比して使われているのか、決めにくい。語源的には同一の可能性があるので、両者を分けずに扱ってよいであろう。動物名と同様に多いのが

小松 小竹 小梅 小笹 小菊 小豆 小杉 小麦
小菜葱 小檜 小茄子 小葱 小根 小芋 小藤
小枝 小藜 小紫あじさい 小紫陽花。

などの植物名である。しかし、動植物名のすべてに「小」が付くわけではない。数ある動植物名のうち、「小」の付くものはいずれかといえは限られている。「小」の付くのは大まかに言って、一次名の中の一部に限られており、また四拍以上の語にも付きにくいと見ら

れる。したがって、

山犬 白熊 はやぶさ もんしろ蝶 ペンギン（
鳥） なめくじ かたつむり ひまわり 朝顔 吾
亦紅 白樺 青柳 山百合 赤松 チューリップ
などには「小」は付かない。

このような小ささ・矮小性を示す「小」の付いた派生語は、外見上容易にサイズの小さいことが把握できるものの名を成分にしている点が共通している。なお、「小梅」は（梅の小さいもの）というよりは、「梅」の下位語になっている点に特徴があり、「小麦」や「小芋」の第二義（里芋）も同様に考えられる。この他にも「小鼻」「小吭」へのどぶえ・気管」「小切手」のような、部分・下位語を指す類例がある。「小脛（はぎ）」「へくくり袴」などの裾を活動しやすいうように、少したくし上げて、少々すねを見せるようにはくこと）や「小豹」（豹の毛皮の模様の小ぶりなもの）などは成分自体が略語化していると見られるものである。

さて、矮小性は自然に小さく可愛らしいものに対する親愛の情を呼び起こすために「小いとはん」「小ぼんちゃん」「小馬」「小萩」のように、小ささから親愛性の方に内包が移行した派生語を造り出している。

人間に関する語では、

小男 小女 小舅 小姑 小頭がと 小者 小あきん
ど 小人 小尼 小使 小旗本（小役人） 小百姓
小作 小旦那 小番頭がと 小坊主 小僧 小泥棒 小
天狗）

などがあるが、人間・職業・身分・地位などを表す語群の中では、「小」の付くものは少数である。この中には、実質的客観的に小柄であることを表すものと、矮小性から転じて卑小性あるいは軽侮性を内包するものなどが含まれており、語によっては両義兼備のものも見られる。例えば「少女」の場合、辞書には①年少の女 ②背の低い女 ③年少の少女 の三義が挙げられるのが通例で、「小男」が体格の小さい男の義とされるだけなのとは差がある。（もともと近世においては、「小男」にも①年少の男子 ②背の低い男 ③つまらない男 の三様の用い方があった。）「少女」以外にも単義でない例は少なくない。「少女」の①のように年齢の低いことを指すものとしては、「小姫君」「小侍従」「小法師」「小君」「小いとはん」「小ぼんちゃん」などがあるが、前述したように、これらは親愛性を指す方に傾斜してきたと考えられる。

五二二 小規模性

小ささ・矮小性が有形の物体名に関わるのに対して、動作名詞・現象名等の場合には、「小」は規模が小さいこと、程度の低いことを意味する。

(二) 小規模性・軽微性・低度性

(i) 名詞成分に付く「小雨」「小風」「小嵐」「小雪」「小波」「小潮」などは、いずれも名詞に「小」が付いたものである。例えば「雨」は〈雨が降ルコト〉であつて、自然現象を名詞として捉えたものと言える。このような例は、具体的には〈小規模の降雨〉〈弱い風〉などを指している。

(ii) 動詞成分に付く場合、四―二の(一)と(二)の二類があるが、どちらも動作の規模の小さいことを意味する。〈軽く…する〉〈ちよつと…してみる〉などの意となる。「小あたり」「小刻み」「小まわり」「小もどり」「小走り」「小急ぎ」など動詞連用形に付くものは、そのまま動作名詞として使われ、主格として機能する場合、状態的な意味となつて形式動詞「スル」を下接する場合、助詞「ニ」を下接して連用修飾語になる場合がある。四―二の(二)に挙げたように動詞として用いられるものがあるが、現在用いられるのは証券取引用語に限られるよう

ある。

(iii) 形容詞・形容動詞・副詞に付く「小」のほとんどは、程度が低いことを示すものである。「小高い」「小広い」「小ぜわしい」「小新しい」「小赤い」「小甘い」「小ずるい」「小達者ダ」「小利巧ダ」「小じつかり」「小だくさん」などで、〈少し…だ〉〈わずかに…だ〉〈やや…の趣がある〉というように、些少性・僅少性・低度性を意味する。副詞に付く例はごくわずかであつて、しかも情態副詞に限られている。程度副詞と陳述副詞に付かないのは、職能からして当然のことである。

(iv) 慣用句の中の「小」も前述の(i)(ii)(iii)と連続して、小規模性・軽微性を示すものであるが、例は限られている。ここに一括して取り上げるのは「小首をかしげる」など、身体部位名を含む慣用句の中の「小」である。この類の特徴は、「小」が連体修飾語としてではなく連用修飾語としてはたらいっている点である。

小首ヲ傾ケル	小耳ニハサム	小膝ヲ打ツ	小股ガ切レ上ガル	小腹ヲ立テル	小腹ガ立ツ／減ル
小腰ヲ屈メル	小胸ガ悪イ				

などの例が挙げられる。これらの句の中の身体部位を指す名詞自体は、可視性という点では、先に五―一に挙げた名詞類とほとんど異なるところが無いが、必ず格助詞を介して特定の動詞、または少数の形容詞に続いている点で質的に異なる。つまり慣用語を構成している点である。この類は等しく

身体的部位名＋格助詞＋述語用言

という句型におさまるものである。格助詞はガ・ノ・ニ・ヲなどで、述語用言の多くは動詞である。句全体として〈少し…する〉〈ちよつと…だ〉〈心もち…する／だ〉という意味をもつ。この句の中の接頭辞「小」は外形上の接続関係とは異なり、実質的には後続の述語用言を修飾する連用機能をもっている。と解されることは先述のとおりで、「深爪を切る」「横車を押す」などと類似の意味構造をもっている。

(二) 不足性・不十分さ

漢語数詞「一」および漢語「半」を前項にもつ名詞に「小」が付いた場合は、〈その数量に近いが、少し足りない〉〈あとわずかで…〉という意味になる。

小一里 小一年 小一時間 小一分(フ) 小一倍
小半道 小半斤

などである。「小一時間」は〈二時間近く、一時間に少し足りないくらい〉の意である。四―一の(四)および注①に記したように、わずかながら「一」「半」以外のものも見られるが、どれも現代の用例ではない。なお「小一週間」「小一分(ブン)」「小一升」「小一キロ」などの例も見当たらない。「小一秒」「小一グラム」などは、成分自体が微量を指しているもので、ここに言う不足性の「小」を必要とする理由がないわけである。

五―三 中立性と積極性

以上に挙げてきた「小」の意味・用法がさらに転化し変質したものが少数ながら見られる。それは「小」の基本義である「小ささ・矮小性」が薄れて、中立化したり、さらに進んで積極性に転じたりした例である。例えば「小っぴどい」は〈非常にひどい〉と解されるのが普通であり、「小っばずれる」も通例〈はずれるを強めていう語〉と解されるものである。「小づらにくい」も〈つらにくいを強めた言い方〉と解されている。「小気味よい」は〈物事の行われ方があざやかで、感じがよい〉というふうにつまえられる。前三者は「小」が付くことによつて、結果的には程度の甚だしいことを指す方向に語義が転じており、最後の例は、積極性が肯定的評価を生む

にいたった例である。「小気味よい」の類には「小ざつぱり」「小ちんまり」などがある。証券取引所用語の「小じつかり」「小動き」「小ゆるみ」「小反落」等々は「小」の原義が生きているが、どちらかと言えば中立的であつて、卑小性や軽侮感を伴わない。

「小」の添加がサイズや程度から離れて、語基成分の指示内容を感じ覚的情緒的に捉えさせるようになったものもある。「小凄まじい」「小ぜわしい」などでは、へなんとなく凄まじいへなんとなくせわしい」という意味とされていて、「もの凄まじい」「ものせわしい」に近づいている。

なお「小」の原義からは添加しにくいように思われる。「たくさん」にも「小」が付いて用いられたことがある。「何ぢやこだくさんに三貫目、三匁もおじゃらぬ」(『女殺油地獄』—中篇)などの「小沢山」はへたくさんなことを卑しめ憎んでいう語。たくさんそう。と注されるように、矮小性は後退して、もっぱら付随的な内包である卑小性・軽侮性の面で機能していると解されるのである。

六 その他の関連事項

ここで前節までに扱わなかつた関連事項について述べ

たい。

六一— 反義辞「大(おお)」との関わり

「大雪小雪」「大波小波」「大雨小雨」「大目小目」など、対句的に用いられるもののほか、単に反義辞として対立項をもつものが少なくない。

大石 大粒 大見出し 大屋根 大橋 大路 大型
大綱 大受け 大亀 大男 大童 大麦 大文字
大物 大門 大山 大指 大道具 大芝居 大太刀
大反り 大坂 大御所 大菊

などには、それぞれ「小——」が存在する。しかし、

大木 大戸 大空 大川端 大神 大火事 大おじ
大見得(を切る) 大水 大御代 大騒ぎ

などには、対立する「小——」は見当たらない。反対に

小萩 小松 小刻み

などには、対立する「大——」はない。

六一— 特殊な「小——」

「夕焼け小焼け」「仲よし小よし」「人まね小まね」のような対句の中の「小焼け」「小よし」「小まね」は珍しい。「大骨を折る」はへ大いに骨を折るの意で、ちょうど「小腰を屈める」のような意味構造である。それに対して「堅い役人だったが、こちらで大骨も小骨も抜い

ておいたから大丈夫」のように使われる「大骨」「小骨」は、「骨っぽい人柄」というときの「骨」であって、「骨折りの」「骨」とは語義を異にする。このように、臨時的に「大—小—」が用いられることがある。「年寄り二人だけですから、大掃除はおろか小掃除も思うに委せません」のように使われることもある。「湖東の小江戸は秋らんまん」はJ R西日本の宣伝誌の見出しに用いられた例である。このように、先に四—一において列挙した名詞以外にも、特定の条件の下で「小—」による派生語が生み出されていくことがわかる。

七 おわりに

以上に見てきたように、「小」の生産性は可視物を指す和語名詞において最も強く、同じく漢語名詞がこれに次ぐが、和語・漢語を問わず「小」と結合しないものの方がはるかに多いのである。特に外来語成分には付かないと考えられることも重ねて指摘しておきたい。

概括的に言えば、和語成分には「小」（時に「豆」）、漢語成分には「小（シヨウ）」の付くことが最も多く、外来語成分には「ミニ」が付くのが基本であろう。ただ漢語成分が日常語化した場合に、和語接頭辞「小」との結合

例を生むようになったわけである。

小論では、小説・新聞・雑誌・辞典などから用例を集めて考察を進めたが、現実の言語使用ははるかに広くゆたかに、そして柔軟に展開されていることを忘れてはならない。今回の接頭辞「小」についての基本的大局的な観察を、今後さらに深める必要があると考える。

註

- ① 玉村文郎「対照研究と日本語学 I 日本語らしさ」(『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社 一九九八年)
- ② 玉村千恵子「嗅覚と非嗅覚 合成語(へくさい)をめぐる」(月刊『日本語』アルク 一九八八年六月号)
- 同 「接尾辞(へがましい)——近現代を中心に」(『日本語・日本文化研究』3 一九九五年)
- 同 「形容詞接尾辞の研究——造語力の観点から」(龍谷大学大学院修士論文一九九九年)
- ③ 国語学会編 東京堂出版 一九八〇年
- ④ 佐藤喜代治編 明治書院 一九七七年
- ⑤ 日本大辞典刊行会 小学館 一九七六年
- ⑥ 接頭辞「小(こ)」を、以下単に「小」と記す。
- ⑦ 引用は「幸田文隨筆集—父・こんなこと—」(角川文庫 一九五四年初版)による。傍線は論者が付した。
- ⑧ 寿岳章子「接頭辞(こ)のもつ問題」(『人文』(西京大学 学術報告) 4 一九五四年)

- ⑨ 『浮雲』第二編第十回の用例。「臺所へ来て見ると、小^{ラフ}洋燈が點^{ちか}しては有るが、お鍋は居ない。」なお後の作品『平凡』三十には「下女が薄暗い豆ランプを持つて来て」とあり、両例は面白い対比を見せる。『明治大正文學全集 第四卷』（春陽堂 一九三〇年）
- ⑩ 「半道」は重箱読みで、混種であるが、（ ）の中に挙げた。以下同じ。
- ⑪ 例外的と考えられるものに次のようなものがある。
「小十人（組）」「小二朱（金／銀／判）」「小三（十石船）」

- 「小六（節）」「小六染」「小六組」「小四つ時」
最後の例を除くといずれも近世に用いられた語である。
直接数字とは関係がないが、時間性という点で連続するものに「小春」と「小日の暮れ」がある。なお、「小春」と同義とされる語に「小六月」があるが、この語もすでに古語化している。
- ⑫ Urban network 10 No.130 (二〇〇〇年九月二五日発行
J R 西日本) J R 西日本紀行『彦根』。
(大谷大学非常勤講師)